

ホラー観賞においてわれわれは本当に恐怖を楽しんでいるのだろうか

森 功次 (東京大学・山形大学)

本ワークショップで私は、戸田山『ホラーの哲学』の中盤部分、すなわち、ホラー作品観賞中の情動・快楽について論じた箇所について検討する、という役割を与えられている。本発表では私は、大きく以下の三つの点について質問したい。

1. 戸田山は信念・判断と情動との関係についてどのように考えているのか。

戸田山は「恐怖には対象の認知が含まれている」(p.33-34)と述べている。じっさい戸田山は、フィクション鑑賞中の情動・行動について説明する際には、信念にいくつかの役割を担わせているようだ。

だがその一方で、恐怖の発動システムについて説明する際、戸田山はすべて表象という言葉に置き換えつつも、信念の役割を限定しているように思われる。戸田山理論によると、まず信念が表象として恐怖システムに入力されると、恐怖システムはその入力元が何かに頓着せずに恐怖システムを作動させる。対象の実在性についての信念は捨象され、恐怖システムに関わる信念だけが機能するという(p.294-5)。だが行動について説明する段になると、こんどは信念が行動への欲求を押しえつづけるため、我々は逃げ出したりはしないと戸田山はいう(p.295-6)。実在性に関する信念は、恐怖システムの中では一度その性質・機能を奪われつつ、また行動抑制のために戻ってくるという構図になっている。

確かにこれはこれで恐怖システムについての一つの説明にもなっているように思われるが、ホラー作品が与えてくれるような高度・複雑な恐怖経験をはたしてこの理論で説明できるのだろうか、というところは少し気になる。戸田山は別の箇所で、われわれは不在や死など複雑なものを怖がることのできるようになっている、と述べているのだが、戸田山はこうした複雑な恐怖についてもこの恐怖産出システムの説明を適用するのだろうか。戸田山には、複雑な恐怖を感じる際の、信念・判断の役割についてももう少し説明を求めたい。

こうした説明を求めるのは、戸田山理論とウォルトンの理論との大きな違いがこの部分にあると思われるからだ。ウォルトンは「信念+生理的・心理的反応」によって情動を説明する、いわゆる認知主義に属する立場に立っており、情動発生や情動の引き起こす行動のなかで信念に大きな役割を認めている。戸田山の立場はそうしたウォルトンの立場とどのような実質的な違いがあるのか、そこを知りたいというのが第一の質問の目的だ。

2. なぜホラーの恐怖は楽しく、他の恐怖は楽しくないのか

第二の質問は、ホラーの楽しさに関する質問である。情動と信念・判断との関係をどのように説明するにせよ、戸田山の理論にはひとつの懸念がある。それは、戸田山は「ホラーの恐怖は楽しいが、他の恐怖は楽しくない」という点をうまく説明できているのだろうか、という懸念である。

戸田山は、恐怖がもたらしてくれる感覚が快をもたらすのだ、という説明をしている。この説明はこれだけだと、他の恐怖はなぜ楽しくならないのか、という懸念を拭えないだろう。ひとつの

回答は、「恐怖はどれも本当は楽しいのだ」というマゾヒスト的な回答であるが、戸田山はその道は採らない。戸田山はここで「感じの解釈」に訴えている(p.336)。恐怖に伴う感じをどのように解釈するかによって、恐怖は快適なものにも不快なものにもなるのだ、というのである。

わたしはここで2つの点について質問したい。

2.1 戸田山は快について説明するなかで、「情動の感じそのものは、大雑把すぎて、恐怖にも心地よい興奮にもなりうるのかもしれない」(p.336)と述べている。ここは少しよくわからない。戸田山は、情動の感じそのものだけでは恐怖にならないという立場なのだろうか。私の理解では、戸田山は「身体知覚こそが恐怖」という立場だったはずなのだが(p.154)。また別の箇所では戸田山は「恐怖がもともと快樂をもたらす」(p.337)とも述べている。

そこで私は明確化のための質問 (clarifying question) として、こう尋ねたい。戸田山の中では「恐怖の感じを楽しむこと」と「恐怖を楽しむこと」は同じことなのだろうか、それとも別のことなのだろうか。このあたりをもう少し明確に説明していただければ、戸田山の理論の特徴がはっきりするだろう。

2.2 併せて尋ねてみたいのは、感覚が快適なものとして解釈されるそのプロセスの内実についてである。このプロセスにおいては種々の信念・判断が大きな役割を担っていると思われるが、戸田山説はそのあたりの内実をあまり説明してくれていない(結局いちばん大事なところがブラックボックス化されていないでしょうか、という気もする)。なぜホラーは楽しいのか、という問いに十全に答えるためには、このプロセスをもう少し説明する必要があるだろう。

補助線としていくつかの事例を考えてみたい。戸田山は恐怖そのものを楽しむ例としてバンジージャンプやジェットコースターを挙げている(p.333)。正直なところ、私はこの例が適切なのかどうかは疑問だ。我々がバンジージャンプやジェットコースターで楽しんでいるのは、そもそも恐怖なのだろうか。「このバンジージャンプは三人に一人の確率で紐が切れます」とか「このジェットコースターは安全点検が不十分なため、途中でシートベルトが切れて放り出される可能性があります」といった案内文があったとき、われわれはそのアトラクションを楽しめるのだろうか？もし楽しめないとしたら何故なのだろうか？

もうひとつの補助線として、数百年前の致死の伝染病について書かれた迫真の歴史書を読む経験を考えてみよう。われわれは読みながらドキドキし、恐ろしい病気だな、と思う。このとき我々はホラー観賞のときと同じような快樂を得るのだろうか。もし快樂が得られないとしたら、もしくは別種の快樂となるとしたら、それはなぜだろうか。(ジェットコースターの事例と違って、歴史書はエンターテインメントのための作品ではない。)

戸田山説でこうした事例がどう説明されるのかを尋ねることで、戸田山説と従来理論との違いが明らかになることを期待したい(他にも、悲劇やアクション映画、恋愛映画などとの違いをどう考えるのか、といった質問も思いつく。時間的余裕があればこうした質問も行いたい)。

3. 戸田山のいうホラーの快樂は、ホラー作品にとってどれくらい重要なのか。

最後に蛇足的な質問をひとつ。

戸田山のいうような「感じの快」が存在することは確かだろう。それは否定し難い。問題はその楽しみはホラーの楽しみのうちどれくらい重要なのか、という点だ。

ホラーというジャンルは、恐怖や嫌悪といった要素を用いてしかじかの形で定義できるだろう(戸田山も暫定的ながらp.179で定義を出している)。だが問題は、ホラーの楽しみをそこからすべて説明する必要はないかもしれないし、もしかしたらその楽しみはホラー経験のなかでは非常に些細なものかもしれない、という点だ。一般論として、芸術ジャンルの定義はそのまま当該芸

術の快の説明になるわけではない（「未来の科学を描いている」ということはSFの楽しみの説明にはならない。）

じっさい戸田山も、ホラー映画がさまざまな価値を持つことを認めており(p.303-4)、恐怖の感じもたらず快でホラー作品の価値をすべて説明しつくそうとしているわけではない。これは正しい。さらにいえば、本書の各所ではホラー映画のおもしろさが語られている（その部分のおもしろさは本書の重要な魅力のひとつだ）が、そうしたところで語られる面白さのほとんどは、演出技法の素晴らしさや、人間に関する重要な真実を伝えてくれるといった点に関係しているもので、身体知覚の快が作品の価値の理由として挙げられることはほとんどない（また事例として挙げられる作品のほとんどが映画作品であって、単純に怖がらせることを目的とする怪談はほとんど例に挙がっていない、というのも注目すべきだろう）。結局、戸田山自身もホラー映画の楽しみとして身体知覚の快をそこまで重視していないのではないかとすら思われる。

戸田山の理論は「怖いからこそ楽しい」という部分を説明できる点で優れている（のかもしれない）。そこは確かだ。だがその部分からホラー作品の価値を説明し尽くせるわけではないという点は押さえておくべきだし、全てのホラー作品が「より怖いほうが優れた作品になる」という評価軸に乗せられるわけではない。この点をふまえた上で、戸田山に最後にひとつ質問をしたい。「ホラー作品は怖くて嫌だけれども楽しい」という楽しみ方をしている人は、ホラー作品の楽しみ方が分かっていないのだろうか。

これは本書の議論からすれば、やや脱線的な質問に思われるかもしれない。だがこの質問は、ホラー作品の芸術的価値を考える際にはけっこう重要な質問だと思う。